

小児の難治性疾患に対して、より良い治療法の確立を目指す

小児医学 石井榮一 医師



PROFILE

いしいえいち◎愛媛大学大学院医学系研究科・小児医学教授。1979年九州大学医学部卒業。医学博士。九州大学小児科、トロント小児病院免疫腫瘍科、佐賀大学医学部小児科などを経て、当院へ。小児の血液、腫瘍、免疫を専門に活躍。趣味は囲碁、テニス、スキー、ドライブ。車好きで優良ドライバー歴は20年。

私は小児科の血液、腫瘍、免疫が専門で、乳児が発症する白血病や乳児期におこる遺伝性の血液疾患などの病態解析や、治療法の確立を目指しています。ただ患者様の数が多い訳ではなく、世界的に見ても確立された治療法は非常に限られています。そのため日本全体で統一の治療、研究を行い、より良い治療法を開発して、それを世界に発信していくことが使命だと思っています。現在、子供の白血病の治療率は8割近くになっているものの残り2割の患者様は治療していないという現状があります。従って通常の治療が効かないのであれば、新たな治療法を導入していかなければなりません。他の重篤な疾患にも言えますが、病気の原因や発症機序を明らかにすることが非常に大切です。子供の病気は原因が単一の遺伝子や病態でお

こることが多く、原因や発症機序なども少しずつわかってきています。原因がわかれば、通常の治療以外に、原因に基づいた分子標的療法や遺伝子治療などを開発していくことができます。当院は県内で唯一、小児の血液や腫瘍などの疾患を治療できる病院です。治療率を100%に近づけるためにも、我々は小児の難治性疾患に対して、より良い治療法の確立を目指して全力で取り組んでいます。

治療において、子供たちが長い人生を生きていくためにも、「より良く治す」ことが必要です。目の前の病気が治っても、合併症や副作用でハンディを背負ったまま生きていくことになれば、本当の意味で治したことにはなりません。心身ともに健康でいられる「完全治療」を目指した医療をしていきたいと思っています。

皮膚疾患から発見された命にも関わる薬剤アレルギーの研究を続ける

皮膚科 藤山幹子 医師



PROFILE

とうやまみきこ◎愛媛大学医学部附属病院・皮膚科助教。1989年愛媛大学医学部卒業。卒業後、当院勤務。その後、松山市民病院勤務を経て再び当院へ。薬剤性過敏症候群の研究を中心に活躍。中・小学生の3人の子供を持つ母でもある。趣味は推理小説を読むこと。

私は皮膚科の中でも薬剤アレルギーを専門としています。薬によるアレルギーには、皮膚に湿疹や発疹ができる軽い症状のものから、重いものまで様々です。重いアレルギー症状では、皮膚疾患の他に発熱や内臓疾患をとまう方がいます。私は特に「薬剤性過敏症候群」という重症の薬剤アレルギーを研究しています。薬を飲むことで皮膚疾患、発熱、肝機能障害などの症状が現れ、重症になると死亡例もあります。約10年前に愛媛大学と杏林大学が同時期に、このアレルギーにウイルスが関係していることを発見しました。当院の橋本教授はこの研究における第一人者であり、厚生労働省の研究班のリーダーを務めています。この症候群の研究は、関係する様々なウイルスを調べることが必要です。当院には県内はもとより、

日本全国各地の多くの病院から患者様の血液が送られてきており、血液サンプルを日本で一番多く所有しています。

この症候群は原因となる薬が決まっています、その薬を処方されている脳外科や精神科、内科などの医師や、アレルギーを診察する皮膚科でも認知されつつあります。しかし、まだ深くは理解されていない部分も多いようです。原因となるウイルスの検査は保険が利かず、大病院や大きな病院でないとできません。ウイルス感染が関係する合併症を突然生じることもありますので、早く診断して、注意して治療を行う必要があります。原因薬剤を使って症状が出た方、投薬を中止してもアレルギー症状が改善されない方など、おかしいと感じたらすぐに紹介していただきたいと思っています。